

演芸場にみる笑いの協同的達成

寺尾香名子

0. はじめに

この論文は、演芸場での笑いがどのように成し遂げられているかを参与観察をもとに分析・考察をしたものである。笑いという行為を考えると、相互行為場面のなかに笑いが存在していると思われる。今回は二人のやりとりではなく、大勢の人々が集まる場所、演芸場に焦点を当てた。演芸場での笑いを研究することで、社会的に成し遂げられるものとしての笑いが見つかるのではないだろうかと考えたのである。

なお、この論文作成にあたり社会学特別講義のため、徳島大学にお越しいただいた岡田光弘先生（白梅学園短期大学）には、1998年12月9日・10日、12月23日・24日と四日間にわたり、私たち卒論生の特別演習に参加していただいた。その際数多くの貴重なコメントをいただくとともに、資料も後日ご送付いただいたことを心からお礼を申し上げます。この論文が何とか形となったのもかなりの部分は、岡田先生のおかげである。記して感謝申し上げます。

1. 観客をいじること

演芸場では、その場にいる観客に対して直接芸人が話しかけて笑いを起こすことがある。それは特定の個人の場合でもあるし、集団の場合でもある。

(断片1)⁽¹⁾ 1998・10・27

- 1 N：横の壁や通路に座っている方もいらっしゃって
- 2 S：ええ
- 3 N：遅きた罰や
- 4 観：(笑い)

(断片2) 1998・10・27

- 1 W：どこから来たんですか
- 2 観：三重
- 3 W：三重からわざわざ大阪まで来て、何もなかったんかい
- 4 観：(笑い)

(断片1)は漫才の本題にはいる前に、漫才師が今日も客席が満員で、立ち見の人までいる状況だとお礼を述べている。そして、立ち見の人や通路に座っている人に対して「立ち見だったり、通路に座ってみななければならないのは、自分たちが時間ぎりぎりにやって来たからである。もっと早く来れば、座れたかもしれないのに。」と漫才師が観客に向か

っていつているところである。一般客の場合、開場時間ぎりぎりに来たとしたら、団体客の人数にもよるがたいてい一階席にも二階席にも座ることができず、空いている通路で座って見たり、場内の左右や出入口付近に立って見たりすることになる。同じ観客の中にも客席に座れる人と、座れない人がいるわけである。⁽²⁾

(断片1)において3行目でのNの発言は観客全体に対して、客席に座っていようがいまいが、「これから行うやりとりで怒って帰るようなことはないですよ」と一種の契約のようなものを芸人が提示していると考えられる。観客は笑うことでその漫才師の提案を受け入れて、この演芸中には立ち上がって帰らないことを示すと考えられる。

現実のコミュニケーションでは、いじられてけなされるようなことをされると観客は怒って帰ってしまうかもしれない。だが、漫才の前振りとして漫才師たちは観客に対して「あなた達は怒って帰ったりはしませんよね」と問いかけをしている。観客はその場を立ち去らないで漫才師たちにいじられても笑うことで、漫才師たちの問いかけを承認している。こうしたことが可能になるのも演芸場という特殊な場であるからだ。

さらに例えば、「昔々あるところに・・・」、「ある日・・・」などから話し始められると、これからはなされる話はファンタジーの話であることが分かる。これらの発言は、これからどういったことが話されるかをある程度限定する役割をもっている。演芸場においても、観客が笑うことで現実の会話ではあり得ないようなことが展開される話(漫才、落語)をくくる役目があるのかもしれない。

では(断片2)はどうであろうか。これは団体客のなかの一人に今日はどこから来たのかを尋ねたところ、その観客は「三重」と答えており、ここでは漫才師と観客による「質問-応答」の隣接対(adjacency pair)が存在した。この(断片2)においては、観客が「三重」と答えたことで、Wの発話を「質問」とみなしたことを観客が表示し、Wは自分の発言を観客がどのように理解したかを観客の発言から知ることができた。そしてその答えは、次のWの発話に影響を与えているといえよう。3行目のWの発言は一般的なカテゴリーを観客に承認させようとしている。ここでは三重という固有名詞が重要なのではない。「三重」を用いて一般化を図ろうとしているのだ。客に笑ってもらうことで、漫才の本題に入っていくことを容易にしている。漫才の前振りとして失礼なことを言われても笑うのが演芸場。けなされたとしても怒ったり、悲しんだりしないで笑い飛ばすための場として存在していることを観客が知っているかどうかの確認作業を芸人は行っている。もし笑わずに怒ったとしたら、観客は分かっていたいなかった。笑えば観客はそのことを分かっていたと芸人は思うだろう。芸人は観客が笑うことを徐々に慣れさせていくために、本題に入ってからではなく、漫才の前振りで笑わせることを行っている。言い換えれば、観客に前振りの段階で笑ってもらうことは、本題に入っても笑ってもらえるように免疫をここでつくっているようだといえる。漫才の初めに客を使うことで、観客に志向していることを示している。客も解答後笑うことによって解答を認めており、解答を認めるということは出演者を受け入れていることになる。つまり、客をいじるための枠組みが演芸場には存在し、客をいじることで演芸者はいじるための枠組みを浮き彫りにし、いじられた客は笑うことでその枠組みを承認している。いじるための枠組みとは、日常の一般的なコミュニケーションでは考えられない場を演芸者と観客が作り上げていくことであり、ここは演芸の場であり、ある程度下品で失礼な言動があったとしても笑って許してもらえる特別な空間であること

を出演者が提示して、観客がそれを了承している。このことにより、演芸場での演芸が成り立っているのだ。

2. 漫才のやりとりでの笑い

2-1. 機械的な振る舞いに対する笑い

(断片3) 1998・10・27

- 1 C: 四年前にお母さんが亡くなって、一昨年お父さんが亡くなって
- 2 B: そうそう
- 3 C: 両親二人とも送ったとこ
- 4 B: 不幸が続きましたね
- 5 C: そのおかげで//優雅な生活
- 6 B: // (ええ)
- 7 観: (笑い1)
- 8 B: いやらしい言い方やめてくれ
- 9 C: 生命保険がっぼり、香典は誰にも分けず自分のもの
- 10 観: (笑い2)
- 11 B: あほなこといいな
- 12 C: ようもうけたらしいな
- 13 B: わずかなこっちゃがな
- 14 C: よっ葬式成金=
- 15 B: =やっほ: :
- 16 観: (笑い3)
- 17 B: あほか
- 18 観: (笑い4)

この話題にはいる前に、世の中何が起こるかかわからないので元気なうちに遺言を書いておいたほうがよいとCはBに勧める。Bは残すような財産は何もないから遺言を書く必要がないという。だが、それは4年前までの話で、Bの両親が亡くなったおかげで今、Bは優雅な生活を送っているのではないかとCがなじるところである。人が亡くなるということは一般的には不幸なことである。だがCはBに対し、「不幸が続いて、つらかったらろう」というような慰めの言葉をかけるどころか、両親が死んだからBは優雅な生活が送れているのだと皮肉めいたことをいっている。1行目や3行目のCの発言に対し、Bは「そうそう」、「不幸が続きましたね」と付加的な発言をしている。「そうそう」は相手の話に同意しており、4行目の「不幸が続きましたね」はその前に発言したCの発言に自分なりの説明を加えている。(笑い1)は両親が亡くなったことと、そのおかげで今の生活があるというこの対比に観客は笑ったのである。

Bが「優雅な生活」を送っている理由をCが9行目で述べている。Bの両親が亡くなったので、二人分の生命保険を手にすることができ、さらに香典をほかの誰にも分けることなく自分だけのものにしたので「優雅な生活」が送られている。6行目までのやりとりで何となく想像はつくが、Bがなぜ優雅な生活を送れるのかははっきりとした理由はわからない。観客にとってBが優雅な生活を送れている理由を9行目で知ることができた。

11行目でBは9行目のCの発言に対して、否定的な発言をしている。13行目の発言も12行目のCの発言に対して否定をしている。一般的に相手の発言に対して自分のコメントを述べるとき、否定をするとそれは非優先的構造になる。だが、ここでは否定が続いているのでBの発言は優先的構造になり、観客にとっても意識することなく聞き取られて

いることになる。ここで会話の優先的／非優先的構造についてふれておく。ローマン・ヤコンブソンの用語法を山田が要約したところによれば、「優先的構造とは会話のシークエンシャルな特徴が無標 (unmarked) であり、非優先的構造とは逆に有標 (marked) であると言える」と述べている (山田 [1993:208])。つまり、この場面でいうのならCはBに対し9行目から嫌味のようなことを述べており、Bはそれに対し否定 (反論) をしている。嫌味を言われて否定 (反論) するのは自然に起こりうる行為としてとらえることができよう。だからBとCのやりとりは優先的構造であるといえる。観客にとっても意識することなく、聞き取られていることになる。

ところが、15行目でBはCの「よっ葬式成金」という発言に対して間を空けることなくすぐに「やっほー」と応答しており、そのときBは両手をピースにして挙げ、片足をあげた。この応答は、Cの発言を否定するものではなく肯定するものであった。この場面においては、BはCの発言の後、前のやりとりに続いて否定することが優先であるのに、Bの15行目の発言は何のマークもなく肯定している。言いよどみや、前者の発言と自分の発言のあいだに (ここでは14行目のCの発言の後、Bが発言するあいだ) 間をあけることなくBは即答した。15行目の発言は、意識して発言されており自然には出てこない。9行目から15行目までのやりとりを次のように表してみる。

- | | | | | |
|----|----------------------------|-----|---|-----|
| 9 | C: 生命保険がっぼり、香典は誰にも分けず自分のもの | -嫌味 | } | 優先 |
| 11 | B: あほなこといいな | -否定 | | |
| 12 | C: ようもうけたらしいな | -嫌味 |) | 優先 |
| 13 | B: わずかなこっちゃん | -否定 | | |
| 14 | C: よっ葬式成金= | -嫌味 |) | 非優先 |
| 15 | B: =やっほ: : | -肯定 | | |

13行目までのやりとりまではCの発言に対してBは否定していたのに、14、15行目のやりとりでは、Cの発言を肯定した。しかもその肯定するやり方が、前者の発言に間をおくものではなく、すぐに応答している。このことから、15行目のBの発言は「機械的な振る舞い」のように見える。⁽³⁾ それでは、なぜ機械的な振る舞いが私たちに笑いをもたらすのか。ベルグソンは『笑い』(1938)において「人間の体の態度、身振り、そして運動は単なる機械を思わせる程度に正比例して笑いを誘うものである。」(ベルグソン [1938:35]) と述べている。人間の振るまいがぎこちなく、ぎくしゃくしたものであればあるほど、人々はその振る舞いを笑うのである。ベルグソンは人間の生は常に何らかの変化をしているが、時に人間の身体や社会生活において機械のように動くことが、人間の変化を滞らせる。そこで笑うという行為をすることで、再び人間の変化する側面を取り戻すことになると思われている。⁽⁴⁾

演芸場での機械的な振る舞いは、会話分析の視点からすると隣接対の第二成分が、不自然に意識して作り出された非優先的構造の時に起こることが分かった。Bの振る舞いは意識したもの、自然ではなくてつくられた振る舞いとして観客に提示されたことになる。9、10行目のやりとり、12、13行目のやりとりではBはCの発言に対し否定し続けた。Cの発言はどちらも隣接対の第一成分として「嫌味」を生成している。それに対しBは第

二成分として「反論」を生成したと考えられる。10行目に反論がなされたのを知っているのにCはまた嫌味を言った。嫌味を言われたら反論することがこの場面で適切な発言となっている。Cは9行目から嫌味を言ったのではなく、5行目でも発言している（「そのおかげで優雅な生活」）。このことからCはBに嫌味を言う役割を持っていることになる。

ところが14, 15行目のやりとりでは、Bは言いよどみや間を空けることなくすぐに発言しており、さらにCの発言内容を肯定している。15行目の発言は突然出てきたのではなく、出るべきところに出てきた発言である。Bは前のやりとりと落差を付けることで、笑いを誘っている。9行目から13行目までのやりとりと14, 15行目のやりとりでは、Bの態度に明らかな違いが見られる。否定すべきところなのに肯定し、また肯定のしかたが即答で行うことが機械的な振る舞いといえよう。

2-2. 観客の声を代弁する

（断片3）での（笑い3）が起こった後17行目でBは「あほか」というつつこみをしている。14行目のCの発言は両親の死によりお金が手に入ったことを一番端的に表現している。おだてられてやった発言に対して「あほか」というつつこみでBは「あほなことをさせるな」、「あほなことを言わせるな」と主張しているように聞こえる。

この「あほか」という発言に注目すると、次のようなことが浮かび上がってくるであろう。Bの発言である「あほか」は、14行目の「よっ、葬式成金」に対してBが「やっほー」と肯定したことへの客観的な感想だと言える。Bの15行目での発言は、相互行為の上では妥当であるが、背後にある社会通念上妥当ではない。しかるに、笑いにおける規範の二重性がそこには存在し、相互行為上妥当かどうかという場合と相互行為を越えて、社会通念上妥当かどうかという場合が考えられる。よってBは自分を客観的に見る必要であった。客観的に自分を見たとき、自分の振るまいがどういうものであったかをコメントする機会を持つことができる。漫才師の二人のやりとりの枠を越えて、二人のやりとりが第三者的な評価、もしくは観客の立場を代表している発言として捉えることができる。

（断片4）1998・10・27

- 1 C: 滅亡や
- 2 B: 【ふんふんとうなずきながら】滅亡てなに: :
- 3 観: (笑い1)
- 4 B: 滅亡というのは私の生活
- 5 C: それは貧乏
- 6 C: つまり滅亡というのは=
- 7 B: =すべてがなくなること
- 8 C: 知っとるがな
- 9 観: (笑い2)

ここでのやりとりは、大きな銀行や証券会社がつぶれている状況で安心して他人に金を預けることができなくなっている。また、他の悪条件が重なって、国が滅亡するかもしれないといったやりとりで話が進められていく。1行目でCが滅亡するかもしれないといっているときに、Bは知っているかのようにふんふんと首を縦に振りながら、Cの発言を聞

いている。ところが、Bは2行目で滅亡という言葉の意味が分からないといった。Bは1行目で滅亡という言葉を知っているように振る舞っていたのに、2行目の自分の発言の場で、この言葉の意味をCに尋ねている。知らないことなのに、さも知っているような素振りを見せておき、実際の発言においては滅亡の意味を知らないでCに聞いている。1行目と2行目のBの振る舞いは異なっているのである。

次の展開として、滅亡の意味を自分なりの解釈で示す。4行目でBは滅亡とは自分の生活状況を指すものであると主張するが、5行目でCはBの生活は貧乏であって滅亡ではないとBの主張を否定する。そこでCが滅亡の意味を言おうとすると、Bが相手の発言に割り込むように「すべてがなくなること」と先に本当のことを述べる。そのことに対してCが最初から滅亡の意味を知っていたのではないかとBにつっこみを入れる。Cの発言「知っとるがな」が何をBは知っていたことを示すのか。それは滅亡の意味をBは知っていたことを示している。Bは自分から滅亡の意味を知らないと言ったうえで、Bは滅亡と貧乏の意味を取り違えた。そこでCが滅亡の意味を伝えようとしたら、先にBから「すべてがなくなること」と言われ、Bは滅亡の意味を知っていたことを7行目の発言からその場にいる誰もが理解することができた。

次の発話において誰もが思っていたこと、すなわち「滅亡の意味は最初から知っていたのではないか」ということをCが代表して発言した。Cの発言が観客の立場を代弁している。一つの漫才を見ていて、二人のやりとりが観客に理解されているとしたら、観客は漫才のやりとりのなかで「ボケ」た人に対して「つっこみ」を入れたくなる。それをその場にいる観客が行うのではなく、舞台の上にいる「ボケ」なかったもう一人が、観客の代わりにつっこみを入れる。そのことは漫才師どうしのやりとりにおいて何ら不自然さを感じることはない。相方だけがぼけた相手に対して「つっこむ」権利を持っているのも演芸場ならではのやりとりといえよう。

漫才のやりとりでは、二人のやりとりの枠を越えた第三者的な立場をとる発言が見受けられる。自分がやったことにしろ（断片3）、相手がやったことにしろ（断片4）、直前のやりとりに関して物理的に時間をおくことで客観的に見ることができる。自分から距離を置くことで客観的な発言の場が与えられる。この客観的な発言は、実はその場にいる観客の声を代弁することになる。演芸場において第三者的な立場をとることが可能なのは、観客の存在があげられる。観客の存在は、演芸中においても忘れてはならない存在である。適切な箇所です第三者的な立場を取り込むことによって、観客に対してのガイドライン（指針）を示すことになるのだ。

2-3. 有意味なナンセンス

大喜利は4人の解答者と1人の司会者が登場して司会者によって出題された問題(お題)を1人ずつ解答していくものであるが、いくつかの問題が提起される。なぞかけやあいうえお作文である。大喜利の最後にあいうえお作文があった。あいうえお作文とは、

- 「あ」さの寒いとき
- 「い」まがわやきを食べたり
- 「う」どんを食べたりしようと
- 「え」んがわで座っていたら

「お」っこちた

と、「あ」から「お」の話がつながっており、「お」の段で（おこそこの...）なんらかの「オチ」をつける問題で、前の解答者が何をいうのかはわかってはいない。私が観察に行った日も、あいうえお作文を作ることになった。その日は、司会者が観客にどの行で作文を作るかを尋ね、観客の1人が「は」行と答えた。「は」行に決まると司会者は「お客様『は』で始まる文をなにか作って下さい。」と言い、彼女は悩みながらも「腹が痛くなったので」と答えた。

司会者が「は、腹が痛くなったので」と繰り返して、高座の後ろに立って客席のほうを向いて高座に座っている、客席側から見て左端の人から順番に「ひ」で始まる文を作ることになった。そこで一番左端の落語家は「ひいひいうなって」といったら、司会者は「は、腹が痛くなったので、ひ、ひいひいうなって、ふ」と次の解答者に発言をふった。解答者は「ふくい総合病院に行つて」と答えた。

二番目の解答者の解答がでたところで司会者は「は、腹が痛かったので、ひ、ひいひいうなって、ふ、ふくい総合病院に行つて、へ」と客席から見て右から二番目の解答者へ発言を譲った。すると彼は「へんな治療をされて」といい、司会者はまたもや始めからくり返し、「じゃあ最後のほ」と最後の解答者に促した。最後の解答者である一番右の人が「ほけんで治した」と発言したところ、笑いがあまり起こらず、司会者は「保険で治した」と解答者に尋ねるような言い方をし、大きな声で発言した。

ここで、 1：へんな治療をされて

2：ほけんで治した

という発言のやりとりがある。この関係について述べてみたい。「あいうえお」作文において、この二つの文の並びは、文章の流れとしては有意味であるが、オチをつけておらず、普通の終わり方をしているのでこの場面としてはナンセンスである。では、なぜそういえるのか。

「あいうえお」作文において、「お」の段はオチをつけるものとしての枠組みが存在する。オチ直前の発言を受けて、オチをつける場所では意表をつくような「オチ」のロットが作り出されている。前後が同じであると「オチ」のロットに適合していないために、理解しにくい構造になってしまう。1行目と2行目は互いの内容が逆のことを指していなければならないのに、作文としてはつながっている。このような場合は、繰り返すことで有意味なナンセンスだということを表示している。⁽⁵⁾

以上見てきたように、この章では実際の漫才でのやりとりで起こる笑い、大喜利のコーナーでの笑いを分析した。やはり、演芸場で忘れてならないのは観客の存在であろう。観客のことを無視しては笑いを起こすことには無理がある。何らかのかたちで演芸者は観客に志向していることを表す。だから漫才師の枠を越えた、客観性を帯びたやりとりが存在しても不適切ではない。むしろ、観客が笑うことで受け入れを表示しているので、適切なやりとりとして観客が見なしていることも分かる。

3. 先終了の協同的達成

3-1. 終了を導くもの

「オチ」があったから笑ったとするのではなく、終了交換⁽⁶⁾の第一成分が芸人から発せられたことにより、終了交換直前の芸人の発言が「オチ」であったことが観客に理解される。と同時にその「オチ」が終了を導くものであったのだと認識することもできる。

例えば、(断片5) 1998・10・27

K：これが本当の老婆の休日で／／お時間と　／／なりましたのでこの辺で

観：　　／／(笑い1)／／(笑い2)　　(拍手)

Kの小話は病院の待合室にいる高齢者の女性同士のやり取りと、診察室での医者と老女とのやり取りをおもしろおかしく話し進めるものであり、上記は終了場面である。Kは「これが本当の老婆の休日」と今まで話した内容を端的な一言で述べている。「老婆の休日」と「お時間となりましたので」のあいだには少し間があり、「老婆の休日」という言葉を聞いて笑う観客もいれば(笑い1)、「お時間」という言葉を聞いて笑い出す人もいた(笑い2)。「お時間となりましたのでこの辺で」とKが言った後に拍手が起こった。

「これが本当の老婆の休日」というKの発言は終了を導くものとして表示していることから「先終了句」⁽⁷⁾(pre-closing)と考えられるだろう。この先終了句を使うことで、話し手はこれ以上話すことがない、終了に向けて開始したことを表しているのである。その後で笑いが起こっているが、Kは「老婆の休日」と「ローマの休日」を掛けている。映画『ローマの休日』を知っている人には理解できる「オチ」になっているといえよう。

演芸の終了を導く際に芸人は「オチ」をつけるのだが、その「オチ」が観客にとって理解しがたいものであったなら、観客は直前の発話を「オチ」であることを理解できず、笑うこともままならない。実際にこの先終了句が発せられたときにはあまり笑いが起こらず、終了交換の出だし部分(「お時間と」)で先終了句の時よりも大きい笑いが起こった。芸人は観客に間接的な表示で終了を提示し(「これが本当の老婆の休日で」)、その後「お時間となりましたので」と終了の直接的な表示を用いて終了交換の第一成分を構成する。この終了の直接的表示から多くの観客は、この小話が終了に向かっていることがわかり、彼が舞台の袖に引き上げようとするのもわかる。そして観客は芸人に対して拍手を送る。

以上のことから、オチがオチであると観客に理解されなかった場合、芸人から発せられる終了交換の第一成分を観客が受け取ることで終了交換直前の芸人の発言が、この演芸でのオチであったことを理解することができる。観客は遅れてオチを受け入れただけではなく、終了交換の第二成分である拍手を送って、終了交換の第一成分も受け入れたことを表示している。

3-2. 笑いが続いたままの終了

演芸場では、5-1のような終了だけではなく、次のような終了も見られた。

(断片6) 1998・7・15

【電話機に10円玉を入れて、ダイヤルを押す仕草をする】

1 E：10円　177

2 F：　　そうそうそうそう

3 観：　　(笑い1)

4 E: もしもしきしよ//うちょう = (どこがやな)
5 F: //ブ:: ブ:: ブ:: 話し中です=
6 観: (笑い2)

【E、F共に客席に向かってお辞儀をする】
7 F: 失礼しました

キャンプに行くからその日の天気が気になるので、電話で確かめるようにFがEに指示した。Eは何度も電話をかけるまねをするのだが、こんな大きい電話はない、電話をかける前に10円玉を入れていないからかかるわけがない、など何度となくFに指摘された。そしてようやくFが肯定したところ、天気予報の電話はあるはずのない話し中であった、というオチでこの漫才は終了する。

Eの電話のかけ方が、Fによって何度も否定されていた。FはEのやり方が気にそぐわなかった。この場面ですべて電話をかける仕草がFの考えと重なった。否定が続いた後に一転して肯定されたことに対して(笑い1)が起こった。Fが、「プープープー話し中です」とオチを言っているときに(笑い2)が起こり、この笑いはFが「失礼しました」というところまで続いている。そのためFの発言を聞こえにくくさせている。

5行目のFの発言とそれに続くEの発言(「どこがやな」)が、先終了として提示されており、7行目の発言が終了交換の第一成分といえる。7行目の発言は、客席が騒がしいので静まるまで待つわけでもなく、静めようとするのでもなく騒々しいなかで発せられている。そのため、終了は観客にとって聞きづらい、聞こえにくい発言だったと考えられる。「話し中です」を聞いて笑い出した人もいれば、Eの発言を聞いてから笑い始めた人もいる。こうしたことが可能なのは、笑いは他の発話行為と少し違った成分を有しているからであるといえる。サックスによれば、人は同時に笑い出し始めることもできるし、ある人が笑っている途中で別の人が笑い出し始めることもできる。すなわち、笑いは重なり合うこともできるし、遅れて笑うことも可能であると述べている(cf. Sacks [1974:347-349])。こうした笑いの成分が、演芸場での笑いを可能にしているのである。芸人が一人か二人であるのに対して観客多数という観点からすると、笑いが重なってもよいことや遅れた笑いが可能なことに対応しているように思える。

観客の笑いが続いたまま漫才は終了を迎えた。オチで笑った人もいれば、Eの発言を聞いて笑い始めた人もいる。笑う人、観客が大勢いたからこうした終了が起こった。観客の笑いが終了を承認し、終了の方向へ向かうことを可能にしている。

3-3. 先終了の協同的達成

いままでの議論を簡単な図に表してみる。

<パターン1> 芸人: オチ
観客: 笑い
芸人: 終了交換 (第一成分)
観客: 終了交換 (第二成分)

<パターン2> 芸人：オチ
観客：笑わない
芸人：終了交換（第一成分）
観客：終了交換（第二成分）

<パターン3> 芸人：オチ
観客：笑い
(笑いが続いたまま終了)

笑いはトピック転換のきっかけになりうるので、終了へ導くこともできるし、また、新たな話題を開始することもできる。<パターン1>の場合、観客の笑いが終了を導いており、次に芸人からの終了交換が始まり、それを観客が受け入れて終了が完了する。これは、私たちが行っている相互行為の終了場面で見かけるやり方である。

<パターン2>においては、観客が笑わなくても終了交換へ持ち込むことができるというものである。これは芸人がオチを先終了句として表示しているものの、観客には理解されていない。観客によってオチが理解できなくても、芸人の終了交換の第一成分を聞くことで、終了交換直前の芸人の発言がオチであったことが理解され、笑いが起こる。さらに、終了交換も提示されているので、観客は終了の開始も受け入れることになる。「笑い」はすぐ笑うように動機づけられてはいるのだが、<パターン2>では、オチの直後に笑いは起こらず、芸人の終了交換の提示があることでオチに対する遅れた笑いが起こる。遅れた笑いは、重なりあう笑い（一斉に笑い出すこと）とともに、演芸場での笑いを可能にしている。さらには演芸者が一人もしくは二人であるのに対して、観客が多数存在する場所で笑いを可能にしている。

<パターン3>は、観客の笑い声によって、終了の宣言が聞こえにくくなっている。<パターン1>や<パターン2>のように明確な終了交換がないのにもかかわらず、芸人と観客のあいだで終了を行っている。はっきりとした終了交換がなくても、終了できたのは観客の笑いが演芸の終了を認め、可能にしているからである。そして、笑いは重なりあうことや遅れて笑ってもよいことが、演芸場での笑いを適切なものになっている。先終了の協同的達成は、終了の協同的達成の派生物として存在している。終了が行われたことを考えて、時間を逆戻りしてみると、終了の直前に先終了の表示があったことを知ることができた。終了が芸人と観客による協同的達成であるように、先終了も芸人と観客によって協同的に作り上げられている。⁽⁸⁾

4. まとめ

本論文では、演芸場が芸人と観客によりどのように作り上げられていくかを示してきた。演芸場での笑いも協同的に成し遂げられている。観客は芸人を志向し、芸人は観客を志向していることを、なんらかの方法で表示しているはずである。観客にとっては笑うことであり、拍手することである。芸人にとってそれは客をいじってけなしたり、演芸のやりとりのなかでも表示している。参与者たちが演芸場を演芸を見て笑う場として意味づける様々な方策が現場にあったのだ。

注

(1) 記号の説明 以下に示すものは、この論文で用いられている記号である。

- ／／ 複数行の同じ列におかれた二重スラッシュ：参加者たちの言葉の重なりが始まる箇所を示す。
＝ 言葉と言葉の間、もしくは行末と行頭におかれた等号：途切れなく言葉つながっていることを示す。
() 丸括弧：当該の文字列が丸括弧でくくられ、聞き取りが確定できないことを示す。
： コロンの列：直前の音が延ばされていることを示す。
【 】 すみつき括弧：参加者の発話以外の諸行動の一部を示す。

以下に示す漢字、アルファベットは、その場面への参加者を示す。

- [観]：観客
[N]：漫才師、Sとコンビを組んでいる。
[S]：漫才師
[W]：漫才師
[K]：落語家
[C]：漫才師、Bとコンビを組んでいる。
[B]：漫才師
[E]：漫才師、Fとコンビを組んでいる。
[F]：漫才師

- (2) 演芸場に入る前にスタッフの方が「立ち見になりますのでその点ご了承ください」と並んでいる客に対して注意喚起する日があった。(1998・8・26)この発言から入場前に座る席はないに等しいことが分かる。
- (3) 今回はBの行った行為(両手をピースにして挙げ、片足もあげて「ヤッホー」と発言したこと)が、日常的に行わない行動であると考えたので、それを機械的な振る舞いだとみなした。この機械的な振る舞いに対しては、もう少し議論の余地があると考ええる。
- (4) 長谷は「映画観客の『笑い』について」(1998)という論文において、人間は「笑う」ことで人間の持つ「生」の機械的な側面の存在を認め、肯定していることを表しているという。つまり、人間のちっぽけで力のないものに対する笑いは、その人間のちっぽけさに対する再評価であるということ述べている。
- (5) 2-2. 観客の声を代弁するところでもふれた(断片3)における14, 15行目のBとCのやりとりも有意味なナンセンスといえよう。
14 C: よっ葬式成金=
15 B: =やっほ: :
16 観: (笑い3)
17 B: あほか
相互行為上適切かもしれないが、社会通念上も適切かどうかは疑わしい。むしろ妥当ではないだろう。なぜならその後17行目でB自身が客観的な判断を下すことによって、15行目の発言が社会通念上妥当でなかったことを示しているからである。
- (6) 終了交換とは、たとえば「さよなら」-「さよなら」のようなものである。はじめの「さよなら」を発言した人は、いま会話を終了したいことを提示している。それを受けて第二成分である「さよなら」を述べた人は、第一成分を生成した提案を受け入れたことになる。こうして会話が終了する。会話の終了は参加者たちによって達成されているのである。
- (7) 先終了句は「正確には『先終了となる可能性のある句』(possible pre-closing)と呼ばれるべきものである。」(Schegloff,Sacks[1972=1995:198])この句を発することで終了を開始したことを表示するのだが、受け手がいままで言わなかったことをこの句の後で言い始めること、新たな話題を話し始めることも可能である。

- (8) 演芸場での終了場面に対し、複数人で会話的相互行為が行われているラジオ放送の終了場面では、話し手からその場を終わらせようとする事はできず、聞き手が終わらせるきっかけを作る。その終わらせ方には段階がある。まず、第一段階として聞き手が相づちを打ち始める。第二段階としては聞き手は「あ～、～ということなんです」「つまり、それは～ということなんです」と評価、要約を行う。第三段階は「わかりました」と聞き手の理解を表示する。第四段階は「ありがとうございました」と聞き手が話し手にお礼を述べる。この段階は、第一段階よりも第二段階、第二段階よりも第三段階、第三段階よりも第四段階のほうが終了に持ち込ませる力が強い。第一段階から第四段階へと強度を増すのである。

参考文献

- Bergson, Henri 1900 *Le rire*=1938 林 達夫 (訳) 『笑い』 (岩波文庫), 岩波書店。
- 長谷 正人 1998 「映画観客の『笑い』について」, 『現代風俗学研究』4 :76-78。
- 水川 喜文 1992 「笑いの社会的組織化—会話分析の知見から—」, 『Sociology Today』3:28-42。
- 水川 喜文 1993 「自然言語におけるトピック転換と笑い」, 『ソシオロギス』17:79-91。
- 西阪 仰 1997a 『相互行為分析という視点—文化と心の社会的記述—』, 金子書房。
- 西阪 仰 1997b 「間身体関係のなかの対象」, 『対話と知 —談話の認知科学入門—』:79-100, 新曜社。
- 西阪 仰 1998 「概念分析とエスノメソドロジー」, 山田 富秋・好井 裕明 (編) 『エスノメソドロジーの想像力』:204-223, せりか書房。
- Sacks, Harvey 1974 “An Analysis of the Course of a Joke’s telling in Conversation” in R. Bauman, J. Sherzer. (eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking* :337-353, Cambridge University Press = 訳年不詳「会話において一連のジョークをしゃべるといふこと」(岡田 光弘草稿 1998・12・21 入手)。
- 佐藤 郁哉 1992 『フィールドワーク —書を持って街へ出よう—』, 新曜社。
- Schegloff, Emmanuel A.; Harvey Sacks 1972 “Opening up closing” *Semiotica*7:289-327=1995 北澤 裕・西阪 仰 (訳) 「会話はどのように終了されるか」, 『日常性の解剖学』:175-241, マルジュ社。
- 樫田 美雄 (編) 1998 『ラジオスタジオの相互行為分析 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書—第二版—』。
- 上野 直樹 1998 「見ることのデザイン —知覚の社会—道具的組織化—」, 山田 富秋・好井 裕明 (編) 『エスノメソドロジーの想像力』:252-269, せりか書房。
- 山崎 敬一・西阪 仰 (編) 1997 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社。
- 山田 富秋 1993 「『おせじ』のプロトコル分析—エスノメソドロジーからのアプローチ」, 海保 博之・原田 悦子 (編) 『プロトコル分析入門 発話データから何を読むか』:202-220, 新曜社。